



東北学院大学 チャペル ニュース

クリスマス 特集号

第95号 2005年12月
東北学院大学 宗教部
仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
〒980-8511 (022) 264-6428

●マタイ福音書五章一三―一六節

あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられるよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。また、もし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。

数年前、東北学院同窓会の支部総会に招かれました。そのおりに、一人の同窓生が挨拶をされ、「伝統というものは人がつくる。しかし、人は、その伝統によってつくられてゆく」と話されました。まったくその通りだと思えました。来年は、東北学院百二十年目、大学設置五十七年目の年になります。私たちは、東北学院の歴史と伝統にあって努力を積み重ねると同時に、育てられているのです。

さて、百十九年前、東北学院、

正確には仙台神学校を前身とする東北学院は、押川方義先生、ホーイ先生、シュネーダー先生の三人を校祖として建学されました。私たちは、これらの三人を「創立者」と呼ばずに、「校祖」と呼んでおります。それは、東北学院を築く際のかれらの理念、とりわけキリスト教の理

巻頭言

(押川・ホーイ・シュネーダー)

三校祖

宗教部長 佐々木 哲 夫



念が、東北学院の土台に据えられたことを、東北学院を構成する一人ひとりが世々において確認し、その上に東北学院をさらに建てあげてゆこうとの気概を込めての表現です。三校祖との呼び方に、東北学院の歴史と伝統が込められており、今日の私たちも、その歴史と伝統に

はぐくまれているのです。

その東北学院の歴史と伝統を聖書の言葉としてキャンパスの所々にみることが出来ます。たとえば、土樋キャンパスの中央図書館の入口に、ご承知の通り、「主を畏れることは知恵の初め(エホバをおそるるは知恵のもとなり) 文語訳」(旧約聖書箴言一章七節)が掲げられており、また、多賀城キャンパス図書館内部には「あなたたちは真理を知り」真理はあなたたちを自由にする」(新約聖書ヨハネ福音書八章三三節)が置かれています。泉キャンパスの図書館入口には「地の塩、世の光」の言葉が記されてあります。

この「地の塩、世の光」は、新約聖書マタイ福音書五章一三節―一六節に記されている言葉です。特に、東北学院の在校生・卒業生に大切にされてきた言葉です。「地の塩」との表現からいろいろな意味が連想されます。特に「塩」は、調味料や保存料(隠し味、塩漬・漬物)、不浄や厄を払うもの(土俵をきよめ、香典返しのお清めの塩)など日常的なものです。そこから連想して、「地の塩」の意味を、長い人生において体験するだろう困難や労苦に耐

え、人間社会全体に貢献する貴重な生き方すると理解するならば、それだけではヒューマニズムの言葉で終わってしまいます。

ところで聖書に「塩の契約」との言葉があります。それは契約を堅く守るとの意味で使われています。「塩」は、確かな信頼性ある者の姿を表しているのです。イエス・キリストは、弟子たちに、「あなた方は地の塩、世の光である」と語りました。それは、教えを受けたものが、教えを受けなかったものよりではなく、教えにふさわしい生き方をする、そして、その生き方は、自分だけでなく、世に貢献する生き方だと教える言葉でした。

「地の塩 世の光」は、今日の東北学院大学を構成する私たちにも今なお語られています。東北学院の理念に触れたものは、それを知らない者のごとくに生きることがないのです。三校祖が据えた東北学院の土台である聖書の言葉を、今一度、東北学院の礼拝堂に集い、再確認し、引き続き、東北学院の歴史と伝統にいかされてゆきたいと願います。

マルタとマリヤ

—自由と無くてはならぬもの—



理事長 赤澤 昭三

●ルカによる福音書

一〇章三八—四二節

38一同が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎えた。39彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。40マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った、「主よ、わたし

の姉妹はわたしだけでもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください」。41主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くなことに思い悩み、心を乱している。42しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアはその良い方を選んだ。それを取り上げてはならない」。

エルサレムの近くのベタニアという村にマルタとマリヤという姉妹が住んでいました。姉がマルタで妹がマリヤのようでした。マルタはてきぱきと行動する生真面目な女性でしたが、マリヤはおっとりして落ち着きの感じられる女性であったように思われます。もっともこのマリヤも時には思い切った振る舞い

にでることがありました。そのことは兄弟ラザロの復活に関するヨハネの福音書の箇所(イエスの足への非常に高価な香油の塗布)でも例証できるでしょう。ところが、ルカによる福音書

一〇章三八—四二節には、イエスが弟子たちと一緒に旅の途中でこの姉妹の家を訪問した時の様子が記されています。兩人がイエスの来訪を受けた折にそれぞれどのように対応したかが興味深く書かれています。そこで姉妹は大切なお客に対して全く異なる行動をとったということです。姉のマルタは急いで戸口に出てイエスを迎え入れました。そ

れから直ぐに奥の台所に引っ込んでイエスたちを歓待するためご馳走の準備を始めました。大切な客に喜んでいただくこととせと暗いに取り掛かったのです。甲斐甲斐しく立ち働く彼女の姿が目には浮かぶような気がします。これは日本の家庭では昔から見掛ける光景です。

ところが妹のマリヤはそんなことには一向に頓着しないで、弟子たちや集まった他の人々と一緒にイエスの傍ら近く座り込んでお話を聞き入ろうとしたのです。マリヤはわざわざ我が家を訪ねてこられたイエスのご好意に対してお話を聴く時間を少しでも多く持つことが良いと判断したのと思います。

これに対してマルタは、イエスが旅の途中にせっかく我が家に立ち寄って下さったのだからご馳走を作ってお疲れの賓客をお持て成しするのが当然の振る舞いであると判断したのでしょう。お茶の一杯も出さないという妹の振る舞いは大変に失礼なことと考えたにちがいないかもしれません。そのためマルタはマリヤの行動に我慢することができないで、妹も自分の仕事を手伝うようイエスに訴えたわけです。言い換えますと妹の怠慢をなじたのです。

さて、この様子をご覧になったイエスご自身は二人の姉妹に対してどのように対応されたかに注目したいと思います。第一に、イエスは、お話を始める前に妹のマリヤに指示して姉のマルタを呼び寄せることはなさいませんでした。また、マリヤに向かつて姉の所に行つて家事を手伝いなさいとおっしゃいませんでした。イエスは姉妹がそれぞれ取つた行動には一切干渉

なさらずそれぞれの自由な選択に任されていたのです。ですからマルタが妹の非協力をなじつたときにそのことをなだめられたものと思います。

これは今日流に言えば、イエスが民主主義の根幹に関わる個人の自由を尊重されたということになりましょう。自由を大切

にすることというのは、自分のしたいことをするということだけでなく他者の自由も尊重しなければならぬことをお教えになったといつてもよいかもしれません。しかしこの箇所ではイエスが最後に教えられたことは、各個人の判断による自由な選択を超えたもっと大切なものがあるということです。私達は自由主義の社会にいますから人間の自由というものが相互に尊重されなければならぬのは当然でありますが、自由ということだけがアルファでありオメガであるということではないということです。

マルタもマリヤもイエスを心から愛していたにちがひありません。マルタはその気持ちをご馳走による歓待で示そうという選択をしました。マリヤはイエスのみ言葉に聴き入ろうという選択をしました。おそらくイエスご自身としては内心でマルタの好意ある振る舞いに感謝されていたかも知れません。しかしご自分がじかに姉妹たちに語る

ことのできる貴重な機会を無駄にして欲しくないとの思いを抱かれたのも事実でしょう。そのためマリヤの選択を是とされマルタの行動を遺憾とされたのです。それが引用した聖書の箇所の四一〜四二節にあるキリストのお言葉によって示されております。

さて、私たちは今年も間もなくクリスマスを迎える時期になりました。社会の福祉や救済のための募金とか奉仕活動などに励まれる方も多いでしょう。あるいはクリスマス・パーティーや忘年会など楽しい計画を立てている方も少なくないことと思えます。でもイエスはおっしゃいました。「無くてはならないものは多くはない。いや、一つだけある」と。クリスマスというの、そのただ一つだけの良いものを受け入れ、神様に感謝を捧げる絶好の機会でもあると思います。

Christmas Message

クリスマスの思い出あれこれ

学院長
倉松 功



私は一九四八年のクリスマスに高知教会で洗礼を受けた。それは、高知市の中心にあって、市を代表する建築物の一つであったが、戦災によって、塔と外壁のみを残した会堂階下で行なわれた礼拝においてであった。その時、(旧制)高知高等学校の先輩たちから、矢内原忠雄の『アウ

グステイヌス・告白講義』をプレゼントとして戴いた。本書は、受洗後の愛読書となった。

このクリスマスの頃からである。高知教会時代のクリスマス恒例行事クリスマス・キャロリングに参加した。高齢や病床の方々の家庭を回り、クリスマス・イヴに、青年会の男女を中心に、クリスマスの賛美歌を歌ったのである。そもそも合唱などしたこともなかった。後について行っただけである。ただその時に、覚えたテノールやバスのパートのいくつかはいまも記憶にある。

一九五〇年以降、始め神学生、次に副牧師として信濃町教会で過ごした。神学生時代、級友故井上平三郎牧師とクリスマスには、馬淵照子牧師夫人を訪ねた。夫人は賀川豊彦の協力者でもあった。公立学校や東京大学野球部合宿舎で働いておられた。篤信のキリスト者であられた。よき励ましを与えられた。二つの家庭集会のクリスマス祝会が印象深い。一つは、裁判官たちの出席がおおかった斎藤直一氏宅の

もの。今一つは、多様な人達が集まった樋口長老宅のものである。それぞれの家庭のクリスマス・プレゼントは特色あるものであった。当時貧しい学生であった者にもそれ相応のプレゼントが与えられた。当時の神学生は、いろいろな家庭や教会の婦人会からクリスマスにはプレゼントが与えられたが、この二つの家庭は、貧しいことを意識させるものでなかった。神学生を大切にする仕方を心得ておられたことを懐かしく、また感謝して想起するのである。

一九五七年から同五九年までが第一回のドイツ留学期間である。その最初のクリスマスは、世界教会会議(WCC)のドイツ留学神学生が、ドイツ・フランクンの白鳥城に全員集められた。城の図書館の古書群は、初めて触れる西洋古典の原書であった。雪に囲まれたお城とそれを取り囲む原野と小さな町の光景は、今日でも鮮やかに目に写る。北はアイスランド、南はインド、東は日本、西はUSAと各国の

神学生、若い牧師たちがクリスマスの日々をこの城で過ごしたのである。

同五八年のクリスマスは、多数のレンブラントの絵を所蔵することでも有名な城美術館のあるカッセル郊外で過ごした。それは前記WCCの幹施で、フィンランド出身のブルクハルト牧師宅が招待して下さったからである。牧師館で牧師家族、教会付

奉仕女たちと静かなクリスマス・の日々を過ごした。ここでは、地元の新聞記者のインタヴューも受けた。まだ東洋人の珍しい頃であったのである。牧師館の直ぐそばの雪の広場に立てられた雪のクリスマス・ツリーは印象的であった。

一九六八年のクリスマスはハイデルベルクで過ごした。その時初めて、大学の教会堂でパッサのクリスマスオラトリオの前半を聞いた。それ以降、いずれも部分的にであるが、ミュンヘンでのミュンヘン・バッハ合唱団やライプツィヒでゲヴァントハウス交響楽団とトマス教会合

唱団などのバッハ・クリスマスオラトリオを聴くことができたが、最初の時のものが深く印象に残っている。それは、全体を包むバッハならではの清澄性もさることながら、あのオラトリオの出だしの部分が、晴朗な(Solenne)クリスマス・メッセジを告げるに相応しい響きをはじめて植え付けてくれたからであるうか。

ドイツのクリスマス・シーズンの特徴の一つはアドヴェントクランツ(樅の木の輪の上のローソクに待降節の日曜日毎に点火する)であろう。食べるものとしては、ヴァイナハツ・シュトレン(通称シュトレあるいは、シュトレン)と呼ばれる大きななまこ型のクリスマス・ケーキと様々なクッキーであろうか。少なくともイギリスでは、アドヴェントクランツとシュトレンは見ることがない。

これらドイツのクリスマスとイギリスのそれとの比較ができる程のものを持っていない。何回かのイギリスでのクリスマス

を経験してみても気が付くのは、

まずブランドイを燃やすクリスマス・プディングであろう。クッキーにも違いがあるの言うまでもない。しかし、大きい所では共通しているように思われる。まずクリスマスは、家庭の集まり、家族の祝いである。しかし、一人暮らしの知人や、その時の私のような寄留者も招待される。クリスマス・ツリーは家族で飾り、家族同志がお互いにプレゼントの交換をする。それだけでなく、クリスマス・の贈り物は、救世軍の社会鍋に象徴されるように、神が主イエス・キリストを私たちに贈って下さったことに対して、私たちも何らかの形で周辺社会の、また世界の助けを必要としている人たちに、できることをさせて戴く贈りもの時でもある。例えば、イギリスのクリスマス・ボックスに相当するものがドイツにもある。

私がドイツで見たのは、クリスマスが近い頃、郵便屋さん日頃のお札にお金を包んで差し上げておられたことである。

Christmas Message

悲しみを乗り越えて

キリスト教科長
佐々木 勝彦



☆
いて、本当に「悲しい」物語を語っています。

へロデ王はひそかに占星術の学者たちを呼び寄せ、言葉たくみにイエスの誕生の地を聞き出そうとします。もちろんその幼子を見つけて殺すためです。しかし両親とイエスは、天使の指示に従って無事エジプト逃げることができました。

問題はその次の記事です。こう記されているからです。

「さて、へロデは占星術の学者たちにだまされたと知って、大いに怒った。そして人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一带にいた二歳以下の男子を、一人残らず殺させた。」

☆

これではあまりに悲しすぎるお話です。よりによって、どうしてこんな悲しいことが起らな

「マタイ福音書」は、「イエ

ス・キリストの誕生」の記事のすぐ後に、「占星術の学者たちが訪れる」「エジプトに避難する」「へロデ、子供を皆殺しにする」「エジプトから帰国する」という記事を配置しています。マタイは、神の子イエスの誕生に関するうれしい知らせに続

ければならないのでしょうか。

わたしたちの経験によると、たとえどんなに暗い現実があっても、ひとりの子供が生まれると、周りの雰囲気はがらりと変わってしまいます。幼子の微笑みが大人に喜びと生きる勇気を与えるからです。

もちろん覚えていないでしょうが、かつて皆さんも、生まれたというその事実だけで、両親に、家族に、喜びと勇気を与えただけです。皆さんが生れたとき、周りの人は間違いなく喜びに包まれたのです。

☆

それにしても、幼児虐殺命令を出したヘロデとはどんな人物だったのでしょうか。彼には、われわれの想像を越える過去がありました。もしそれを知ったなら、皆さんは思わず「本当にそんな人がいるの？」と問わずにいられなくなります。ある書物に、こう記されています。

「妻マリヤは、その兄アリ

トスブロス二世、その母アレクサンドラ、妻の伯父アンティゴナス、叔父ヨセフ、さらに自分の息子の三人までもが、彼の手にかかって殺された。」三十六年間という彼の長い統治は、この血なまぐさい犠牲によって維持されました。さらに彼は、自分が死んだら、家毎に一名を殉死させ、喪に服するように命じたそうです。そのため皇帝アウグストゥスはこうと言ったと伝えられています。「ヘロデの息子であるよりは、豚の方がまだ安全だ」と。

☆

マタイはこの幼児虐殺の「悲劇と悲しみ」を表わすために、旧約聖書の「エレミヤ書」(三一章)の言葉を引用しています。「主はこう言われる。ラマで声が聞こえる。苦悩に満ちて嘆き、泣く声が。ラケルが息子たちのゆえに泣いている。彼女は慰めを拒む、息子たちはもういないのだから。」

理不尽な仕方ではが子を奪われた母親の「嘆き悲しむ声」が聞こえてきます。ここでは、北王国イスラエルがアッシリアに占領され、イスラエルの指導者たちがアッシリアの各地に連れて行かれた様子が想起されています。

ラマはベニヤミン領で、エルサレムの北方約八キロメートルにある南北国境近くの村です。ラケルは族長ヤコブの妻で、ヨセフとベニヤミンの母です。それは紀元前七二二年に起った悲劇であり、著者エレミヤが活躍する約一三五年も前の出来事でした。

ところがエレミヤは、この「ラケルの嘆き」に続き、「主はこう言われる。泣きやむがよい。目から涙をぬぐいなさい。あなたの苦しみは報いられる。……あなたの未来には希望がある。」「わたしは彼を憐れまずにはいられない」と語っています。「憐れむ」とは、母の胎が痛むという意味であり、エレミヤは、神の思いを、母親がわが子

を愛する思いになぞらえています。それは、理不尽で、悲しみに満ちた現実も、必ず神が受け入れてくださる、との約束です。神ご自身がその道を備えてくださる、との励ましです。

☆

マタイはイエス・キリストの誕生の記事に、このエレミヤの「ラケルの嘆きとヤハウエの憐れみ」の記事を挿入しました。それは、イエス・キリストこそが、エレミヤが約束し、待ち望んでいた「憐れみ」の出来事だったからです。幼子の誕生という喜びと子供の皆殺しという悲劇のコントラスト、ここにクリスマスの深い意味があります。

世界は、今もなお目を蔽いたくなるような苦しみと悲しみに満ちています。権力を保持するために、あらゆるものを破壊しようとする狂気が渦巻いています。この暗闇の現実にもかかわらず、私達が、今なお希望を持ち、夢を描くことができるのは、

イエス・キリストが皆殺しの現実の「ただ中に」生まれたからです。

たとえそこに全く光が見えないように思われるとしても、つぶやき、うつむくのをやめ、顔を上げましょう。さあ、幼子という光に目を注ぎ、自らの生の深みをもう一度味わってみましょう。あなたは、今、ここで、心の底から喜び、歌うことを期待されているからです。

この号を手にしてている頃は、
ちょうど大学クリスマスが開
かれていることと思います。

一年生諸君にとっ

泉 キャンパス

は初めての経験か
もしれません。第
二次大戦の後、戦
後日本社会にクリ



大学宗教主任 永井 義之

スマスは年中行事として定着
してきました。家庭で祝われ
るクリスマス、仲間や友人

スとは CHRIST-MAS と書く
ように、キリスト (CHRIST)
を拝む礼拝 (MAS) が本来

クリスマス

たちとのクリスマス会、プレ
ゼント交換、等々、その形は
さまざまですが、年の瀬十二

月の行事と
して欠かせ
ないもので
あるようにで

す。

の姿です。大学クリスマス礼
拝を通してぜひ本来のクリス
マスを確認し、それが何であっ

たのか、またどんな意味があ
るのかを考えてほしいもので
す。

各キャンパス の メッセージ

今年もクリスマスを祝う時
期となりました。町にはクリ
スマスの雰囲気漂う時です。

多賀城キャンパス



大学宗教主任 野村 信

どんな祝い方をし
ても、本来クリスマスは礼拝
をする時なのです。そもそも

東北学院では、この精神を継
承して、クリスマスの礼拝を
行います。多賀城キャンパス

「キリスト」と「ミサ(礼拝)」
が合成されて「クリスマス」
という言葉になったものでは
ありません。

から、キリ

ストを礼拝

することが

クリスマス

であるとい

うことです。

のクリスマス礼拝は、十二月
十五日です。各教会でも十二
月十八日の日曜日にクリスマ
ス礼拝を行うと思います。こ
こで真のクリスマス心を心より
祝いましょう。



土樋 キャンパス

大学宗教主任

北 博

またクリスマスが巡って来
ました。学生の皆さんには、
それぞれ様々なクリスマス
の思い出があることでしょう。
今年のクリスマスはどのよう
に過ごされるのでしょうか。

東北学院大学では授業終了の
日にそれぞれのキャンパスで
クリスマス礼拝が持たれます
ので、是非出席して気持ちを
リフレッシュしてから冬休み
に入ってください。

ところで、クリスマスとは
何でしょうか。楽しく騒いで
過ごす西洋のお祭りと思っ
ている方が多いようですが、
本当は救い主の到来を祝う時
です。ルカによる福音書二章
一四節には、野宿している羊

飼い達に突如天使の大軍が現
れ、「いと高きところには栄
光、神にあれ/地には平和、
御心に適う人にあれ」と言っ
て去った、と書いてあります。

「地には平和」。この一年の世
界の状況は、この言葉とは程
遠いものでした。度重なる災
害と相変わらず続くテロ、ま
さに絶望的状况と言えるでし
ょう。でも、こんな状況から
こそ、それぞれ自分に何が出
来るか、世界の平和のために
何をなすべきかを今一度自分
自身に問うべきだと思ってい
ます。今年のクリスマスは、そ
のことを静かに考える機会と
しませんか。

1 בְּרֵאשִׁית־ בְּרָא אֱלֹהִים אֶת-הַשָּׁמַיִם וְאֶת-הָאָרֶץ
 הַיָּמָּה תְּהִי נֹחַדִּי וְחִשְׁבָה עַל-פְּנֵי תְהוֹם וְרִחַף אֱלֹהִים מִרְחֵם
 הַמָּיִם׃ 2 וַיֹּאמֶר אֱלֹהִים יְהִי אוֹר וַיְהִי-אוֹר׃ 3 וַיֹּאמֶר
 אֱלֹהִים יִבְרָא אֱלֹהִים בֵּין הָאֹר וּבֵין הַחֹשֶׁךְ
 אֱלֹהִים יִלָּאֵר יִם וְהַחֹשֶׁךְ קָרָא לְלַיְלָה וַיְהִי-עֶרֶב וַיְהִי
 אֶמֶר׃ 4 וַיֹּאמֶר אֱלֹהִים יְהִי קֶרֶב הַיָּמִים וְהַיָּמִים
 בֵּין מִן הַלַּיְלָה׃ 5 וַיִּשַׂשׂ אֱלֹהִים אֶת-הַקֶּרֶב וַיִּבְרָא בֵּין
 מַסְמַחַת הַקֶּרֶב וּבֵין הַמָּיִם אֲשֶׁר מֵעַל לְקֶרֶב יְהִי-יָבֵן
 אֱלֹהִים לְקֶרֶב שָׁמַיִם וְהַיָּמִים עֶרֶב וְהַיָּמִים בֹּקֶר וַיִּשַׂן
 וַיֹּאמֶר אֱלֹהִים יִקְוֶה הַמָּיִם מִסְמַחַת הַשָּׁמַיִם אֶל-מָקוֹם אֵל
 תְּרַבְּשָׁה וְהָיָה-בָּן׃ 10 וַיִּקְרָא אֱלֹהִים לְלַבָּשָׁה אֶרֶץ וַיִּלֶךְ
 11 קֶרֶב יָמִים וַיִּבְרָא אֱלֹהִים כִּי-יָמִים׃ 12 וַיֹּאמֶר אֱלֹהִים תִּדְבַּר
 יְשׁוּעָה עֲשֵׂב מִזֶּרַע זָרַע עֵץ פְּרִי עֵשֶׂה פְרִי לְמִלְחָה אֲשֶׁר

キリスト教 Q & A

1 Ἐν ἀρχῇ ἦν ὁ λόγος, καὶ ὁ λόγος ἦ καὶ θεὸς ἦν ὁ λόγος. 2 οὗτος ἦν ἐν ἀρχῇ πάντα διὰ αὐτοῦ ἐγένετο, καὶ χωρὶς αὐτοῦ ὅ ἐγένοντο. 4 ἐν αὐτῷ ζωὴ ἦν, φῶς τῶν ἀνθρώπων. 5 καὶ τὸ φῶς ἐν καὶ ἡ σκοτία αὐτὸ οὐ κατέλαβεν. 6 Ἐγένετο ἄνθρωπος ἀπεσταλμένος αὐτοῦ Ἰωάννης. 7 οὗτος ἦλθεν εἰς ματυρίαν περὶ τοῦ φωτός, ἵνα πάντες πιστεύσωσιν ἐν αὐτῷ. 8 οὐκ ἦν ἐκεῖνος τὸ φῶς, ἀλλ' ἵνα μαρτυρήσῃ τὸ φῶς τὸ ἀληθινόν, ὃ ἐρχόμενον εἰς τὸν κόσμον. 9 Ἦν τὸ φῶς τὸ ἀληθινόν, ὃ ἐρχόμενον εἰς τὸν κόσμον, καὶ οὐκ ἔγνω. 11 εἰς τὰ ἴδια ἦλθεν, καὶ οὐκ ἔγνω.

Q、サンタクロースって何？

サンタクロースに関して、聖書は、何も記していません。それは、四世紀の小アジアの町のシユラの司教であったニコラウスが、ある時、貧しい三人の娘さんたちに嫁め入り時の持参金としてそれぞれに金貨入りの財布を夜中に部屋に投げ入れたとの伝説に基づいたものです。「サンタクロース」の名称は、聖ニコラウスの愛称であり、オランダ語のシント・クラウス (Sint Klaus) がなまったものと言われています。

聖ニコラウスの祝日は十二月六日で、特に、ドイツ、スイス、オランダでは、その前夜が子供たちの楽しみとする贈り物の日でした。後にニューヨークに移住したオランダ系プロテスタント住民がアメリカ

カに伝え、クリスマス・プレゼントという既存の習慣と習合したと考えられています。トナカイに乗って来て、煙突から入り、靴下にプレゼントを入れていく赤服で白髭の好々爺は、世俗化されたサンタクロースの姿です。

確かに、聖書には、サンタクロースは登場してきません。しかし、サンタクロースの贈り物以上のプレゼントとも言うべき出来事が記されています。即ち、救い主イエスの誕生です。クリスマス(御子の誕生)は、神がわれわれに与えてくれた最高の贈り物です。

(佐々木哲夫)

Q、クリスマスっていつからいつまでなの？

十二月二十五日がクリスマスであることはよく知られています。十一月の終わりから十二月初旬にかけて、商店街では早々とクリスマスの飾り着けがなされます。そして二十五日が過ぎれば飾りはすべて取り払われて今度は正月に向けた飾り付けの準備に入ります。これは私たちのまわりでよくみかける風物詩のよう議だとは思っていません。ここから考えればクリスマスは十二月二十五日までで、二十五日を過ぎればクリスマスではないと思うのはごく自然かもしれません。

クリスマスは確かに十二月二十五日という頂点をもってありますが、その日だけを祝うというわけではありません。クリスマス・シーズンというように一定の期間をもった祝われ方をして来ましたが、クリスマス当日からさかのぼる四週間前の日曜日にアドベ

ント(待降節)の期間に入ります。これはクリスマス待ち望む期間であり、準備の時です。そして待降節第四の日曜日が(降誕節)クリスマス礼拝の日ということになります。教会では十二月二十四日のイブ礼拝あるいは、二十五日の降誕日礼拝が行なわれます。しかしこれでクリスマスが終わったわけではありません。一月六日、異邦人への主の顕現を祝う公現日の前日までがクリスマスの期間ということになります。つまり待降節、降誕節あわせて約五週間がクリスマスにかかわる期間となります。二十五日が過ぎてもあわててクリスマスの飾りをしまい込む必要はないのです。商業ベース主導のクリスマスではなく、落ち着いたクリスマス今年を祝ってみませんか。

(永井 義之)

2005年度 宗教部の活動

通 年

- 大学礼拝
 - 礼拝 (朝) 土樋・泉・多賀城キャンパス 月～土曜日
 - 礼拝 (夜) 土樋キャンパス 毎週水曜日
- 寄宿舎礼拝
 - 泉男子寄宿舎 毎週月曜日
 - 泉女子寄宿舎・旭ヶ岡寄宿舎 毎週火曜日
- 聖書研究会
 - 土樋・泉・多賀城キャンパス
- 宗教部会 毎月
- 4月 チャペルニュース92号 (新入生歓迎号) 発行
キリスト教活動のハンドブック発行
第10回スプリングカレッジ (16日)
- 5月 春季宗教教育強調週間特別伝道礼拝
泉 (11日)・土樋キャンパス [朝] (12日) 説教者 嶋田 順好先生
多賀城 (11日)・土樋キャンパス [夜] (11日) 説教者 濱田 辰雄牧師
- 6月 チャペルニュース93号 (春季特別伝道礼拝特集号) 発行
キリスト者推薦学生との懇談会 (7日)
礼拝奉仕者懇談会
多賀城 (14日)・泉 (16日)・土樋キャンパス (29日)
- 7月 宗教部研修会 (1日)
第29回青山学院合同チャプレン会議 (15～16日)
第31回サマーカレッジ (26日～28日)
- 9月 第51回教職員修養会 (1日～2日) 講師 池田 守男先生
第10回宗教部事務研修会 (30日)
- 10月 秋季宗教教育強調週間特別伝道礼拝
泉 (4日)・土樋キャンパス [朝] (5日) 説教者 大坂 譲治先生
多賀城 (5日)・土樋キャンパス [夜] (5日) 説教者 川原 啓美先生
チャペルニュース94号 (サマーカレッジ・秋季特別伝道礼拝号) 発行
- 11月 オータムカレッジ (22日)
- 12月 チャペルニュース95号 (クリスマス特集号) 発行
泉キャンパスクリスマス (2日)
大学クリスマス
土樋・泉 (14日)・多賀城キャンパス (15日) 説教者 棚村 重行先生

2006年

- 1月 第10回キリスト者教員研修会 (7日)
- 2月 礼拝オルガニスト懇談会 (13日)
礼拝司会者懇談会 (13日)
- 3月 大学礼拝説教集 (第10号) 発行
研修会・修養会発題報告集発行

Q、クリスマスツリーって?

クリスマス・ツリーは、すっかり日本中に定着し、みなそれぞれ美しく飾ってこの時期を楽しんでいます。しかし最初のクリスマス・ツリーは

もっと様子が違っていたようです。その起源は、森の国ドイツであったと言われています。八世紀の初め、当時広く行われていた恐るべき風習がありました。それは、北欧神話の知恵、詩、戦争、農業の神で

あるオーデインの聖なるかしの木に人間を犠牲として捧げるといふものでした。イギリスから渡ってきていた宣教師のボニーフェイスがこの習慣を止めさせようとして、幼児キリストへの捧げ物を捧げるようにしたのが始まりだとい

われています。近代になって歴史的に確かなのは、一六世紀の宗教改革者 M・ルターが、クリスマスの季節に子供たちに、夜空にきらめく星々を示すために室内にもみの木を立てて、ローソクに火をともし飾っ

たと言われています。以来もみの木にりんごやバラの花、さらに金粉や砂糖で飾ったりして、世界に広まっていきました。ごてごたと飾りたてたクリスマス・ツリーよりも簡素で美しいツリーを本来飾りたいものです。

(野村 信)

● 編集後記 ●

今年度の最終号となりました。一年がまもなく終わろうとしています。植物が年間を通して生長するように私たちも何らかの成長を遂げたのだらうかと、ふと思えます。さまざま反省と悔悟の末に、よし、来年は何とかしようと決意はするものの、また同じことの繰り返しとならないだらうかと考えてしまう。頑張らないで頑張りましょう。

(N・A)